

開催報告「2018年度中部支部例会」

加藤 竜司

2018年度(第9回)支部例会は、2018年11月20日(火) 13:00~18:00、名古屋大学創薬科学研究館(2階講義室・ホール)にて開催されました。

開催幹事の開会あいさつに続き、招待講演の第一部では、「特別講演：日本生物工学会第37回生物工学賞 受賞講演」として、浅野泰久氏(富山県立大学生物工学研究センター・工学部生物工学科)から『微生物から動植物へと展開する酵素利用技術とその基盤開拓』のご講演をいただきました。浅野氏には、本会受賞講演では触れられなかった深い内容や苦労談なども交えてご講演をいただき、会場からは多くの質疑が寄せられていました。

招待講演の第二部では、「企画特別講演：中部発バイオベンチャーの躍動」として、2つの中部地域発ベンチャーのご講演をいただきました。加藤晃代氏(名古屋大学発ベンチャー iBODY株式会社)には「iBodyの抗体開発技術で何が出来る？」のご講演をいただき、革新的な cell free タンパク質発現系を用いた抗体開発技術の開発秘話からベンチャーとしてのご経験・現状などについてご紹介を頂きました。手塚建一氏(岐阜大学大学院医学系研究科・しずい細胞プロジェクト)には、「HLA ハプロタイプ細胞資源としての歯髄細胞」として開発の進む、しずいバレーの構想や、しずい細胞と iPS 細胞とのつながりとセルバンクの可能性についてご紹介を頂きました。中部地域では、近年中部地域の5つの国立大学法人と日本ベンチャーキャピタルが共同で運営するベンチャーファンドの設立など、中部が得意とする製造業から医療・バイオまでの幅広い分野に向けてのベンチャー育成の土壌が育成されつつあります。生物工学が深く関連すると考えられる今回ご講演頂いた2つのベンチャーは、中部地域のアントレプレナーシップを牽引する存在として、参加者に大きな刺激を与えていました。



図1. 講演会の様子

支部例会後半では、「若手講演」として下記10件もの若手研究者の先進的かつ活発な研究成果が発表されました。

- ・米村開氏(名大院・理)「シトクロムP450BM3の酵素活性を向上させるペプチド様分子のスクリーニング」
- ・ワイズ里沙氏(名城大院・農)「白色腐朽菌 *Phanerochaete chrysosporium* が生産する多機能な class 3 P450」
- ・唐澤昌之氏(名大院・理)「基質模倣物による酵素の誤作動を利用した菌体内でのベンゼン直接酸化」
- ・本山智晴氏(静県大院・薬食)「含窒素ヘテロ環式化合物の酵素法による合成への展開」
- ・山田和広氏(名城大院・農)「麹菌摂取による宿主の腸内細菌叢の変化と大腸炎抑制効果」
- ・岡大椰氏(名大院・農)「データマイニングを用いた *Aspergillus oryzae* 由来転写因子 XlnR」
- ・竹村謙信氏(静岡大院・自科教・バイオサイエンス)「ナノ粒子表面の局所プラズモン領域を利用した高感度ウイルス検出技術の創出」
- ・吉田啓氏(名大院・創薬)「iPS細胞培養プロセス評価のための形態情報解析」
- ・蟹江純一氏(名大院・工)「三量体オートトランスポーターアドヘシンを利用したオンファイバーディスプレイシステムの構築」
- ・磯崎勇志氏(三重大・工)「膜受容体に対する立体構造認識モノクローナル抗体作製とそのリガンド作用」

全講演終了後、中野秀雄支部長からの閉会挨拶を経て、支部例会は終了しました。会終了後は、名古屋大学創薬科学研究館のホールにおいて交流会が開催され、交流会最後に若手講演から支部長賞受賞者が発表され、本年度は竹村氏(静岡大)、蟹江氏(名大)、吉田氏(名大)の3名が受賞されました。例会参加者は65名、うち43名が交流会に参加し、盛況な会として閉会いたしました。

最後に、本支部例会にご参加いただきました皆様に深く御礼申し上げます。次年度も、多くの方にまたご参加いただき、生物工学が中部でさらに発展することを祈念します。

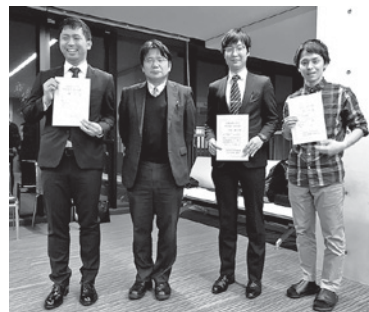


図2. 支部長賞授与(左から、蟹江氏、中野支部長、竹村氏、吉田氏)